
俺トゲッターミネルバト高校生活24時

引導 修羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺トゲッターミネルバト高校生活24時

【Nコード】

N5685H

【作者名】

引導 修羅

【あらすじ】

不良もどきの主人公の高校生活が一変して戦闘生活！？不良予備軍主人公の戦闘漬け高校生活！（哀れ

第一章：新たな魔神

とりあえず一個言う

拒否権？そんなものない

俺の名前は夕餉朝日^{ユウゲアサヒ}至って普通の高校三年生だ

赤い髪にピアス、187センチな健全日本男児（？）だ

なんだよ、不良かよとか思うなよ？実は学年トップだ

家から徒歩二分たらずの陣代高校に通っている

まあ、成績はいいから外見で呼び出しなんてない

そんな俺の父親と母親はロボット関連の研究者（現在進行系）

時代の戦いが激化していく中で、つい最近言われた。ピンチになったら家の地下にいけ、と

なんかあるらしいが興味がないのでほったらかしだ

というか両親は数年に一回来るか来ないかの奴らだ
家は無駄に豪邸で掃除が困る

そつこう話をしたが、事実俺は今超絶ピンチなんだよ

最近よく現れる機械獣
それが何故か…現れた

おっきな何とかタワーのどこ

巨大な飛行要塞が

俺の真上にドーンと現れた

「……………ってアゝアゝアゝアゝアゝ………!!………」

逃げ遅れたアアア！！

ヤベエエエエ！今日はサボって失敗したアアア！！！！

どうする…？

どうすんのよ！？

ライ。カード！！

続く！

…て、昔あったよね、CM…

和める状態じゃねえええええ！！！！

ちょ！マジピンチ！

オマケに変な鉄の仮面付けたヤツら徘徊してて逃げれねえ！

「誰かいたか？」

「いや、いない」

ごめん、いる！！

てか逃げ場ないんですケド？；

どう逃げるか考えている俺を余所に、戦闘は激しくなる

破片や砂埃が舞い散る

そんな最中の出来事

今宵、月は、どこを照らすの

厚い、雲に、覆われた空

無情に鳴る携帯のメロディー

サアア…と血の気が引いた時には時、既に遅し

「おい！いたぞ！」

「追え！」

やっぱりこつなるのオオオ！？

急いで携帯に出ながら走り出す

携帯の画面には

「親父」……………お前かアアアアアアアアアア！！！！！

「はいもしもし!？」

「おお!朝日か!」

「テメーどんだけ空気クラッシャー何だアアア!」

「ピンチか?」

「だから何だ!？」

「叫べ!あれだ、ガンダムファイターのな!」

「何でだアアアア!」

「じゃあこう言え!とりあえず来いつて言え!」

「なん…あつぶな!転ける転けるうう!こ、来い!!!(こつなりや
ヤケだ!!!)」

ブ
ア
ア
ア
ア
!!
!!

第一章：新たな魔神（後書き）

オリジナルの機体「ゲッターミネルバ」が出て来ます！オリジナル機体が苦手な方は観覧しないで下さい

ゲッターミネルバ誕生

視界が一気に高くなる
うわー、と思っただのも束の間

俺は摩訶不思議な空間に立っていた
何か朱とか紫の蛍光が目に見える機械で作られた空間だ

電話から親父の憎たらしい声にすぐさま現実に戻された

「出来たか？」

「…いやいや、なんかもうツッコむ気力起きないんデスガ？」

「そこはsee saw roomだ」

「しーそー…るーむ？」

シーソーの部屋？

日本語じゃねえ、むしろシーソーねえ

「その中はゲッターミネルバと外の狭間だ」

「ゲッターミネルバ？」

「今お前と同調してる機体だ。シーソーの間と考える」

「ッ！？」

「始まったな？」

何だろうこれ

頭がクラクラする

変な感じがする

骨と骨が解け合って一つになる…みたいな…

あれ、目の前が暗くなった…ッて…ハッ!?

空間が見えるのに

…外の光景が事細かに頭に流れ込んでくる

やがて影響は止まった
状況になれてしまったから

「どうだ、感じるか？ゲッターミネルバを」

「…風が吹いてるな……ミサイルが飛んでく……あぶねえ!!
!……………」

ミサイルを間一髪で避ける

俺の動きに合わせてゲッターミネルバ（で、いいよな？）が俺と同じ動きをする

親父がまたもとんでもない事を言い出した

「後は自分でやれ！」

「ハアアアアア！？………」

「ゲッターミネルバが教えてくれる！」

ブツッ

ツーツー

親父が帰ってきたらフルボッコにしよう、そう決意した

ゲッターミネルバとの同調

携帯で急いで親父にかけ直す
しかし…

「着信拒否されてます」

短期間でどうやったら着信拒否可能なんだああああ！！
数秒だぞ！？ たったの！！

前を向く

…と、機械獣

1

2

3

はい、せーの…

「ブレストファイヤー!!」

ドガアアアア!!

あ？鬼だ？

んなもん知るか（正真正銘鬼

お前な…いきなり目の前に機械獣いたらやるだろ？
おーおー、溶けてる溶けてる

…ん？ブレストファイヤーって何だ？

「お前が私の主か？」

「誰だ？」

「私だ」

頭に流れる映像は…
そう、まさしくゲッターミネルバだ

「私はゲッターミネルバ…お前は私、私はお前…」

「一心同体って奴か？」

「間接的にそうなる。さあ、戦え…」

「え、ちょ、は？」

「感じる、己の意志で」

声が途絶える

絶対に親父の行動パターンインストールされてる
断言しても構わない

「おい、その機体！応答しろ！」

（何イイ！！？）（若干恐怖

「正体は問わん、今は協力しろ！」

あまりの迫力に俺はコクコクと頷くしか出来ない

が、正体を問わないと言った側から名前を聞かれる

思わず首を横に振る

不審に思われる前に意識を集中させる

今は…これだ！

「ゲッターミネルバ、シレーヌモード!!」

ゲッターミネルバに翼が生えた

機体の形が所々変わる

・

仕組まれた道化

シレーヌモードはいわゆる飛行モードだ
町を破壊しないから好都合だ

一気に機械獣の群のど真ん中に突っ込む

周りにいるのは五体

ならば大掛かりにやらずに地道に落とすに限る

「ゲッタートマホーク！」

肩からトマホークを出す

どう言う構造なのか知りたいが今は目の前に集中する

シレーヌモードを解除し、ガラダの腹部を斬る
爆発で破片が飛び散ったとき、腕に破片がぶつかる

鈍い、痛み

(ッ?...傷はなくても、痛覚は繋がってるわけか)

これは気をつけなければと微かに余裕が出来る

その勢いに乗ってダブルスを二体倒す

もう、止まりやしない

残り二体を切り倒した頃には、先にいた機体達も攻撃していた

「ヘルアンドヘヴン!!」

「ブレストファイヤー!!」

「サンダーブレイク!!」

破壊力がどれも凄まじい
だが、町への被害は無に等しい

全員戦い慣れていた

（勝てるな…これは…）

その考えが甘かった

「キヤアアア!!」

悲鳴が鳴り響いた

全員が背後を見ると、アフロダイが捕らえられていた

油断していた

昔からよく言う、勝ち戦は五分を持って良しとせよ

今は明らかに油断としか言えない

後悔しても既に遅い

巨大な飛行要塞が後ろへ下がる

アフロダイを人質に取られた以上、下手に動けばアフロダイはおろかパイロットも危ない

大きな高笑いが響く

「はアーはっはっはあ！無様だな、兜甲児！！伏兵を忍ばせていた様だが、それも無駄なこと！」

伏兵…って俺か！？
俺は一般人！

…心で叫んでおく

「アフロダイを救いたくば、こいつらを倒せ！」

「！？」

全員の耳に響く無情な言葉
誰もが疑いたくなる言葉だった

魔神VS魔神

要求を呑んだ俺らは軽くやり合う程度だった

だが、途中でトレーラーだかいう奴らが来た途端、本気で打ち込み始めた

（油断したら…やばい！）

俺は何かないかと意識を集中させる

やがて決心を付けると、マジンガーにシレーヌモードで突撃した

マジンガーも周りも驚いている

真っ先に正気に戻ったマジンガーがロケットパンチを出す、俺はそれが届かない上空まで飛ぶと、エネルギーを溜める

「ゲッタービーム!!」

腹部の一部が開き、そこからビームが出る

マジンガーが避けようとするが、ゲッターミネルバのビームはただのビームではない

腕を動かすと、その方向にビームが動いた
ゲッターミネルバのゲッタービームは手動で動かせる

逃がしはしない

だが、それでやられるマジンガーではない
当然、反撃される

「光子力ビーム!」

目から出される光
威力は強く、ゲッタービームが相殺されてしまう

巨大な爆音と煙が覆う

それは俺にとつては好都合
向こうにとつても好都合

シレーヌモードで一定の距離を間取る

煙がまだ薄らがない
一気に…片を付ける！！

ゲッターミネルバに全ての意識を集中させる
バチバチと体に電流が走る

…プラズマエネルギーチャージ

両手に熱い物を感じる
プラズマエネルギーが溜まっているのだ

チャージ…完了!!

「プラズマサンダー!!!」

「ブレストファイヤー!!!」

爆音が響く

肌を感じる痛み

煙が巻いたが…マジンガーはボロボロになりながらも立っていた

流石…としか言えない

・

マジンガーの最期

「……………」

俺は何も言わずに飛行要塞を睨みつけた
バチバチと名残のある手を飛行要塞に向けて、新しいプラズマをチャージする

だが、マジンガーに止められた

「頼む、止めてくれ！今やったら…さやかさんが！」

(……………チッ……………)

プラズマチャージを中止する
今は言う通りにしよう

「さあ、あしゅら男爵！さやかさんを解放しろ！」

「断る！」

（だから…言っただけなのに！）

飛行要塞がマジンガーの前に来る

その一言に誰もが耳を疑う

「さあ、ファイナーレだ！弓さやかを殺し、貴様も殺してやろう！」

だが、銃撃が鳴る

飛行要塞のカタパルト部分に当たり、ハッチが開く

先ほどまでいなかったAS（で良かった筈）が現れ、遠距離の銃撃を行っていた

よく当てられるな…

アフロダイが逃げる

それに激怒した敵はマジンガーだけでもと倒そうとする

だがマジンガーが飛行要塞に飛びつく

自爆した

何が何なのか理解出来なかった

爆発したマジンガー
砕け散った飛行要塞

爆発で飛ばされたゲッターミネルバ達が気がつけば…敵はもういなかった

マジンガーの残骸が…消えていた

「ッ！」

回収された後だ
どこにもなく、忽然と消えた

敵が持ち帰ったのだろう
再生させる気だ

「……ゲッターミネルバ…シークレットモード…」

ゲッターミネルバの姿が消える

シークレットモードで姿を隠したのだ
付いてこられたら面倒だから

シレーヌモードで家に帰る

とりあえず今日は何もしたくない

家に付くといつの間にか家の前にいた
ゲッターミネルバも消えている

今までの事は夢だと思いたい

人の死を見た
それだけで気持ち悪くなる

家につき、自室に戻ると鞆を置いてベッドに倒れ込んだ

.

第二章：戦いの渦

「ふぁ… あぁぁ…」

眠い…

オマケにだるい…

あんだけ動いた後なだけに体が悲鳴を上げている

あれが夢ではないと証明する物
それは…

『辛そうだな』

(… 超辛い…)

『慣れてくれば平気だ』

(慣れてたくない…)

ゲッターミネルバと意識と意識を通じて会話が出来る
その声は俺にしか聞こえない

「体いてえ…ん…？」

目の前の青い髪の女生徒
見知った顔だ

「ちーどりー」

「え…何で朝日が朝にいるの！？」

「え、俺そんな先入観？」

生徒会副会長の千鳥かなめだ
俺一応役員だし

とりあえず呼び捨てにさせてる。奴に先輩なんぞ言われたら絶命間
違いなしだ

つらつらと思いはせっていると、がしんと頭に妙な感触

「動くな。手を開いて降伏し

「相良君!!」

ベシンと相良と呼ばれた男子生徒がハリセンで叩かれる

ぶっちゃけてしまおう、話に付いていけない

言い争っている夫婦（違）は放って置いて、俺は屋上に向かった

もちろん寝るためだ

出席日数はどうにかする

授業も寝るだけだし、それなら屋上のほうがいい

カンカンと階段を上る

扉を開けると、ひんやりとした風が顔に当たる

カーディガンを布団代わりにし、鞆を枕にした

疲れを癒したいし、さばりにも打ってつけだ
早くも睡魔が襲ってくる

冷たい風と暖かい日差しに誘惑された俺は、そのまま眠りだした

・

全身スーツのグッドガイ

…何故だろう、今起きてはいけない気がする

本能的な何かだ

なんか、このノリで起きると絶対なんかに巻き込まれる…

「…キレイな空だなー…」

清々しい青色

雲もあまりない…晴て…ん…？

起きちゃったアアアアア！…！

心の中で俺の叫びは虚しく響く

あ、ちよつと泣けてきた

砂に水の入り交じった（要するに泥）で構成された心が砕けそう。
現在進行形で

『朝日』

（？）

『敵だ。出るぞ』

（ええ！？何で！？）

確かに昨日は成り行きで戦うが今日は戦う義理はない
俺は平和に過ごしたいんだよ。そんなアグレッシヴはいらん（駄目

人間

しかも敵なんていない
見渡しても何も無い。空気だ

空気は敵じゃ『お前は私を馬鹿にしているのか？』滅相もござい
ません

『あそこだ…あのビル…』

（何かの研究施設だと思ったけど…）

『行け！早く！！』

（ハ、イイ！！）

急いで階段を降りる

近道の為、裏路地を通ると何かに遭遇した

全身スーツのグッドガイ

…仮面まで…うわ、仮面グロイ！実出てるし！

だが、そのまま消え去った

独り言の様に

「待っている…ブレード…」とか言ってた

とりあえず薬中と思おう

それでいいのか byゲッターミネルバ

俺は人目に付きにくい場所まで移動する
ここなら見つからない…よし、いける！

「来い！！」

.

ラダムと交戦

ゲッターミネルバが現れ、空間に自動移動する
二回目だから感覚も慣れた

辺りを見回せばラダムと…不思議な二体のロボット

赤と青のロボットが交互に攻撃してはいる

こっちを見られた

ここで一つ暴露。実は俺見られるのが大の苦手
外見で只でさえ注目されるのに話しかけられた日にはリアルに昇天
出来る

眠いときはテンションがおかしい。だから朝千鳥に話しかけた
人と話す時は目を合わせない

『朝日、後ろ』

(後ろ…?)

見た

ラダムがいた

三体いた

何故か凄い死にたくなった

とりあえず殴る

緑色の体液出てきたッ…キモい!

感触はゲッターミネルバを通じて手に伝わってくる

思わず腰に手を擦り付けた

よくいるだろ、トイレ出た後に手洗ってズボンに付ける奴

言っておく、俺は自然乾燥派だぞ!断じてズボンにはやらん!

『朝日、まだ生きてる!』

(チッ…ここじゃ狭いな)

路地は戦いにくい

とりあえずお馴染みシレーヌモードで空中に行く

キモい、沢山いる

とりあえず住居地区での戦闘だけは避けたい

湖近くまで誘い出す

全員が住居地区から離れたところで戦闘を開始する

「ゲッタートマホーク、ブーメラン！」

ゲッタートマホークを投げつける

横に軌道を取りながら切り裂いていく
だがまだ息がある奴もいる

そいつらは一体ずつ片づける事にする

肩からトマホークを出し、さらに二つのトマホークを繋げる

「ゲッタートマホーク、サイト!!」

鎌状にして斬りつける
あっと言う間に片付いた

だが、増援が来た

それに続く新たな機体も来る。戦艦が出た方は味方の様だ

(…ゲッターミネルバ)

『…わかった…』

俺は姿を消す

こんだけいれば平気だろうと踏んだからだ

素人よりはプロフェッショナルに限る…し、何より前回の疲労が取れていないから

（帰って…寝るか…）

・

第三章：復活の魔神

あれから数日がたった

特に変化はなく、疲労も消えた

だが、おかしい夢を見る様になった

誰かが呼んでいる

ゲッターミネルバを…だ

夢では良くわかるのに、覚めた途端にわからなくなる

何故か最近の俺は不安に駆り立てられていた

何故かはわからないのに…異様に

まるで夢が何かを言っているかのように…何かが起こるかのように…

- 屋上 -

気が進まない

ここんところ、生徒会も出ていない

授業に出ても益々やる気が消えた

溜息を付いて空を見る

風が早い

気まぐれ程度に寝ようか検討してみる

駄目だ、寝る気も起きない

……いい加減ストレスでおかしくなってしまうそうだ

だが、そんな俺のストレスは一瞬にして消え去った

寒気がする

んなわけはない。今は夏真っ盛り、稀に見る猛暑だ

直接的ではなく、直感で何かを感じ取っていた

俺は鞆を手に取ると急いで階段を下りる

廊下を走る音がやけに響く。今は授業中だから

教師の注意なんて聞こえない。俺は外靴に変えると路地に向かった

「来い！」

空間に移動する

そして向かったのは山だ

何故か無性にそこに行かなければならない気がした

胸騒ぎは、大きくなる一方だった

山に着くと、すぐに目に入っ たものがある

機械獣だ

光子力研究所もある

グレートマジンガー達が戦ってはいるが、あれでは防ぎきれないだろう

（しゃーないな…やるか！）

シークレットモードで進む
機械獣の背後まで回る

「プラズマエネルギー…チャージ！」

•

胸騒ぎは現実に

「プラズマ…サンダー!!」

手の蓄積されたプラズマを一つの塊にして投げつける
貫通力バツグンだ

グレートマジンガー達が俺に気が付く。グレートのパイロットと目
があった気がした

守りたいという気迫が伝わる
きつと生真面目なんだろうとか思いながらも戦う
幸い疲労は取れたから

グレートのパイロットが機械獣の群にツッコむ
その背後に…ダブラスが…

俺はトマホークでそのダブラスをたたつ斬る
グレートと背中合わせになりながら戦う。悪い気分ではない

飛行要塞に乗っている…たしかあしゅら男爵だかが悔しそうに見て
いる

それを見て…いや、あの、ここで真面目雰囲気壊します

俺
の
サド心
に
火
が
ついた（爆

ば、罵倒してエ…！

なにあの悔しそうな顔！俺に罵倒してくれと言わんばk（自重

口に出そうなある意味R指定付きそうな言葉（グロ的な意味）を我慢する

そうしながらも敵を倒す俺。自分でも器用だと思う

危うく囲まれたが、そこはWで光子力を持つ機体だ。アイコンタクトで俺は上空、グレートは地上から共に攻撃する

「ブレストバーン…！」

「ブレストファイヤー…！」

熱系武器で全体の敵を溶かしていく。二つが合わさると威力も半端ない

（後は…あいつだけ！）

やはり増援を出したが、あの程度ならば問題ない

…だが、また胸騒ぎがした

ゲッターミネルバが俺の意志に関係なく動き出す
俺は何故か止められなかった

ゲッターミネルバの視線の先
そこにいたものに、俺は一気に絶望する

【マジンカイザー】が、いた…

.

奈落の絶望

マジンカイザー

親父が以前話してくれた

昔の知人と作つたと

神にも悪魔にもなれる魔神と

俺は目を離せなかった。その機体に目を離せない
今ならわかる、あいつに呼ばれていたんだ、ゲッターミネルバは

ゲッターミネルバと同調できる、俺も含めて

何かが降下する音がした
戦艦とそこから出る機体達

Gアイランドのラダム事件の時にいた戦艦達だ

加えてカイザーも近付いてくる
光子力研究所を狙っているらしく、機械獣には目もくれない

(…勝てるか?)

『お前の力次第では…な』

(聞き方変えるな。…見込みはあるか?)

『数パーセントならば』

（勝つ、だぞ？）

『お前の力によっては勝てる。だが機体の性能にかまけていては…
負けるのではなく死ぬな』

（…そうか）

死ぬのだけは頂けないと余裕に思ってしまう。生き恥を晒すのはごめんだが

カイザーが向かってきた瞬間に来た物体。早すぎて見えなかったが…
…ゲッターロボだ

真ゲッターが来たお陰で味方の士気も上昇している

ゲッターロボとゲッターミネルバは似ている。デザインが似ているし、攻撃も瓜二つだ

だが、絶望的な状況は変わらない

カイザーがゲッターミネルバばかりを執拗に狙う。本能的な何かが異色な機体に気が付いたのだ

かわしても動きが違う

カイザーの威圧感も凄まじい
同調で本領発揮のゲッターミネルバの精神的感覚は俺と繋がっているから、上手く動けない

威圧感や覇気に圧されている

本来ならば焦る。俺は焦ることが出来ない。恐怖が全身を支配するから。自分でも自覚する程

笑うしかないとはこの事だろうか？あまり笑えないけど

腕にルストトルネードが当たる
機体が溶けかった

肉体的には影響はない。感覚が繋がっているから激痛が来る

肉が、削がれて、焼け爛れて、剥がれ落ちる感じ。腐敗して腐ると言ってもいい

例えはそんな感じ。解説してるが痛みに狂い出しそう

ヤベ、発狂するかも

人間は恐怖に刈られると狂った思考回路になるらしい

痛ければどうすればいい？
其処を削ぎ落とせばいい

腕が腐ったら？

腕を丸ごと切り落とせばいい

目が片方抉られたら？

もう片方も抉り出せばいい

心臓を食い荒らされたら？

そのまま全身食わせてしまえ

痛ケレバ手当シロトカ
腐ツタトコダケ切レトカ
モウ片方ハ決ラレルナトカ
心臓食イ荒ラサレタラ死ヌトカ

安易ナ答エガ出テコナイ

痛ミニ身ヲ委ネテ

更ニ狂ツタ方向ニ行ク

サア、来イ。 才前ヲ更ニ狂氣ニ連レテ行ツテヤルヨ…

『朝日ッ!!!』

魔神に託した希望

現実が戻って来る

カイザーの剣が目の前にある

間一髪でかわした

体の自由も利く

（サンキュ、ルー）

『死ぬところだったな』

（痛みで頭逝ってたわ）

あながち間違いではない
頭が逝ってたのは確かだ

狂気に佇む陰の存在

俺を誘い込む狂気という、おぞましく甘美な罠…

思わず酔いしれてしまいそうだ

…とりあえずあんな頭逝くのはこれで最後にしようと思つ

『…ルーとは？』

（ゲッターミネルバって長いからルー）

『…ネーミングセンスが…』

（なにも言つな。其処は適当に武士の情けを掛ける）

『…ああ…（武士の情けに適当はないだろう朝日…）』

とりあえず親睦があつた
今回だけは…ありがとう狂気

どうやらあのパイロットは兜甲児というらしい
…マジンガーZのパイロット…

理由は不明だが、カイザーに乗っているのはそいつらしい

「甲児君！早くしないと布団引つ剥がすわよ！！」

鬼だアアア！鬼がいるぞオオオオ！！（滝汗

冬場は地獄だぞ…（・ω・）

「兄貴！また寝坊かよ！」

「兜！早く起きろ！」

寝坊扱い！？そのせいで俺危険な目に遭ってたよ！？

「邪魔をするな！」

今まで空気だった（ちよまつ）あしゅら男爵が飛行要塞で突っ込んでくる

カイザーにだ

だが、グレートがカイザーを自力で守り抜く

体はグシャグシャになっていて見えていて痛々しい

「甲児、目を覚ませ！お前はカイザーも悪魔にする気か！！」

悪魔

ドクン、とルーが反応する
機体から光子力が溢れ出る

それが、カイザーに吸収される

…神々しい光が、場を照らした

・

ある意味集団リンチ

「ファイヤーブラスター！」

飛行要塞が溶ける

攻撃者は…カイザーだ

漸く目が覚めたらしい

こいつが目エ覚める代わりに俺が狂気で可笑しくなりかけた

…意味ねえな…てか不毛だ…

なんだ、ガルラとかいう奴らが来た
そして飛行要塞の残骸から、妙なマジンガーZ…あしゅらマジンガ
ーと言っらしい

イボの付いたキモい名前のキモいマジンガーZもどきだ

キモいだらけだ…合掌（待て

やっぱりもどきはもどき
すぐに倒せてしまった

凄いきたりな負け台詞を吐いて去った

俺はすぐさまシークレットモードで場を離れようとする

…

………

………ん？

腕に… あつれ？カイザー？
あれおかしいな、もう片方にはグレートだぞ？

目の前には…戦艦二隻

あの、主砲的なあれが向けられてるんですけど…？

「あー、出来れば私たちとたのしいお話をしませんか？」

白い戦艦から少女の声

可愛いかもしれないが目の前の…主砲…

もう片方の青い戦艦から…脅しの様な（最早脅し）内容を聞かされる

「納得したかねばこの場でしばらく眠っていただくことになるのだが…」

死ねと？俺に死ねと？

主砲が怪しげにきらめく

俺は…その場でひたすら頷くばかりだった…

このヘタレが
byルー

・

第四章：文化祭企画開始！

「……なーんか急展開……」

ぼそりと呟いた言葉は空に吸い込まれて、消えた

国連の事務局直属組織で、組織名が【ヴェルター】

そんなアブナイ組織に狙われた俺、夕餉朝日
勧誘ではない、あれは脅しだ。でも入っちゃったよ

千鳥や相良もいた
よくわからないミスリルだかのスペシャリスト……？だかな相良らしい
とりあえずこれからは宗介と下の名前で呼ぼう

一つ欠伸
鳴るチャイム
小腹が空いた

ルーに問い出す

（カレーラーメンとチャーハンどっちがいいと思う？）

『…カレーラーメン』

（まじか）

とりあえず雪谷食堂に行ったらカレーラーメンを頼もうと決める
後に後悔した。カレーラーメンを選んだ事に

- 雪谷食堂 -

「親父ー、カレーラーメン」

そう言って椅子に腰掛ける
欠伸をする

眠い…とにかく眠い

丁度目の前に黒い触り心地バツグンの枕がある
引き寄せる…重いな…

でもそのまま寝た
カレーラーメンが来るまで…

パシン！！

頭に鈍い痛みを感じた
うつすら目を開ける

「あーさーひー…」

「ゞ（、ω、≡、ω、）ノ」

「喋れ！！」

「Σ(。□。;)」

ハリセンで叩かれた

何を怒ってるんだろう…千鳥は

枕が呻いた…呻いた？

それは枕ではなく…甲児の頭だったのだ
どつりでさつきからアジエンスの匂いがすると…

「オハヨウ甲児。そんでもってオヤスミ…」

「起きろおお!!」

「ふわふわ…もふもふ…」

「朝日イイイ!!」

バキッて鳴った

もうハリセンの音に聞こえない
でも甲児は離さない

頭が…もふもふなんだ…よ…

「…寝たな…」

宗介の言葉は…ある意味の絶望でしかなかったという

・

ラグビー部とヴェルター

「ラグビー部？…そんなのあったか？」

「あるから困るのよ！」

（相変わらず甲児を抱きながら）千鳥から話を聞く

ラグビー部が廃部になるらしいのだが、何やら試合に勝てば廃部は取りやめらしい

…で、それに選ばれた宗介と千鳥。大変そうだ（´・ω・´）

「…で、どーすんの？」

「とりあえずヴェルターのみんなにも協力してもらうことにして…」

「チーム自体の能力は悪くない。一週間もあれば形になるだろうさ」

隼人が言う

だが問題は…ラグビー部本体らしい

乙女な部員達の集合体らしく……別の部活にしろよ……

そう言っていると料理が出来たらしい

匂いを嗅ぐが、何故かお湯っぽい……え、これカレー……？

何故か茶色に変化したお湯に見えてならない……

箸を突っ込んだ

ポチャンとなった

お湯にしか見えなくなった

凄いカレーが分離した

「親父ー、これカレーか？」

違う。これはカレーじゃない
カレーと称した別の物体Xだ

甲児の離せと言う声はスルーして…とりあえず食べた

ズズ…

ズゾゾゾ…

もきゅもきゅ

もちゃもちゃもちゃもちゃ…

…ッ!?

う、美味い…!?

「…………美味い…」

全員が俺の言葉を聞き逃さなかった。ある意味すげえ

俺は何も言わずに甲児の口にカレーラーメンを突っ込んだ

甲児が…むせた

水を凄い勢いで飲み干す

俺はさらに何も言わずに隣にいた弁慶の口にカレーラーメンを突っ込んだ

弁慶が後ろに倒れた
心なしか白目だ

俺は周りを見回して竜馬にターゲットを絞る

だが逃げられた（当たり前）

ほかにも危険を察したのか退避していた（犠牲を伴ったが）

「…美味しいのに…」

朝日は極度の味覚音痴だ

特に劇的に辛い物は味覚が正常に作動できないから

ちなみに後にアキトは語る

「あのとき間違えて唐辛子を一キ口袋の半分入れた」と…

結論：朝日は極度の味覚音痴

（+天は人に二物を与えない）

.

突撃 レポートラグビー部

「……おい、敦信…何だこのくだらない企画は…」

「見ての通りだよ」

「…俺は一介の役員…」

「ほう…その外見で言うか」

外見は放っておけ！

俺は今友人兼会長の林水敦信に無理難題を課せられていた

「ラグビー部突撃取材」

何故か企画書

日数や写真のサイズ、練習の時間帯による内容、事細かに書かれていた…

これだけ調べていれば取材はいらないと思う

「文化祭に張り出すんだ。それを見て人が食い付いてくれればいい」

「は？」

「ラグビー部の応援が少なければ学校の部活に対する偏見が生まれてしまうんだよ」

「…つまり人を集めるために取材して…文化祭に張り出して人を集めるのか…」

上手く行くかはさておき…

「…あれ…ラグビー…部？」

何だろう、最早あれはラグビーの音ではないぞ
ちょ、さっきから聞こえる罵りの声は何だ…なんだこのちょっと行
き過ぎた罵声は…

「ジシイの。。。みたいにひいひい言わせてやる！行くぞ、この
。。。め！！」

ギアアアア…

何だ最後の断末魔…

何なんだあの罵りは…

台詞に修正掛かってるぞ…

もうちよい綺麗な言葉使えよ…

「……」

何も言わずに携帯を取り出す
新規メールを作る

from:夕餉朝日
—————

この場を取材出来る勇者はいない気がする
とりあえず練習風景

、(*、Д)(ノ)(;)Д)

o-|-)〃。Σ(。□。;))

(ノ-”-)ノ 〇-|-|-

これしか言えない
スマソ(´・ω・、)

『何だその顔文字豊富のメール』（…俺にはこれしか方法がないんだ…）

『…文で伝えろ…』

（スマソ…。。）（ノド）（。。）（。。）

『（…）2ちゃ。ねるモード』（…）』

・

勝負は明日！

（…明日の企画は正午辺りが山場だな…午前は特に正門辺りの警備を強化して…）

一応は役員なので真面目に仕事をする。…雪谷食堂で

アキトのラーメンを食べながらジッと書類に目を通す

明日は文化祭なだけに関係のない溜まっている仕事もやっていた

だが本命は文化祭。無企画にして問題があった時に呼び出し、なんて事になりかねない

それだけは避けたい…

もきゅもきゅと麵を頬張っていると、汗の匂いがした

後ろを見ればヴェルターのラグビー部の助っ人達と千鳥

千鳥が異様に顔色が悪い
明日がそんなに不安か

他の奴らが席に座る（無論、甲児は足の間に座らせた。身長は俺の方が上だから助かる）

書類を見ていると妙な内容が書かれていた

像をグラウンドに置くらしい
機械獣の像を、二体も

不思議に思い、千鳥に聞く

「千鳥。この内容なんだ？」

「ん？…さあ」

「…どのクラスだ？ちゃんとクラス書いておけよ…」

クラスが表記されていない

担任しつかり…

…そういえば、と思い返す

たしか明日の文化祭はファースト姫が来る筈だ。そんな中で敵襲なんてなったら笑えないな…

念の為にいつでもルーを呼べる様に、あまり仕事を受けない方が良
いだろうか…？

ラーメンを食べていると予鈴が鳴った。屋上で寝るか

甲児も食べ終わっていた。よし、チャンスだな

「千鳥。甲児午後の授業休むから」

「は？…あさ、ひい！？」

俺は颯爽と甲児を連れて屋上に向かった。屋上に付くと…甲児を抱き枕にして横になる

睡魔が来た

そのまま意識を手放した

・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5685h/>

俺トゲッターミネルバト高校生活24時

2010年11月10日03時04分発行